

英語の授業を英語で行う実践例

梅地 哲郎（山口県立華陵高等学校）

1. はじめに

平成25年(2013年)度入学生から年次進行で実施される学習指導要領案において、高等学校の英語の「授業は英語で指導することを基本」(p.93)と平成20年(2008年)12月に発表された。その発表はマスメディアにおいても取り上げられ、それ以来、英語教育界でも準備のための研究会が各地で開催されている。

ところで、仮に次のような薬が開発されたらどうだろうか。その新薬は1錠1万円ではあるが、たった4錠を飲めば瞬時に英語ができるようになるのである。私は、そんな薬が存在すれば、飛ぶように売れるのではないかと想像する。今まで努力しても英語が一向にできるようにならなかった日本人が、膨大な時間をかけて英語を学んでいたのは一体何だったのだろうと驚きとも落胆ともとれぬ声を上げるのではなかろうか。

この新薬についての記述は、残念ながら、フィクションである。しかしながら、仮にこの錠剤があったならば、高等学校での英語の授業は取りやめて、みんなで錠剤を飲んだ方がいいと私は考えている。そのように便利な錠剤があるのに、膨大な時間を掛けて英語を学びなさいと言う教員がいるとすれば、それは英語を教えるのが目的ではなく、努力することの価値を教えるのが目的であろう。「英語ができる」という結果が出るのであれば、それに至る手段は問わない、と私は考える。

そこで考察の対象になるのが以下の2点である。まず、「英語ができる」とはどういうことを考察する必要がある。つまり、「英語の授業を英語で行う」のはあくまでも手段であり、「英語ができる」という目標の中身が明確であってこそ、それに至る手段の有効性の評価を適切に行うことができるからである。

次に、「なぜ」英語の授業を英語で行うのかを考察する必要がある。つまり、前述の新薬が未開発であるなら、「英語ができる」という結果を導く上で、なぜ「英語の授業を英語で行う」という手段が有効なのかという考察を行いたい。

最後に、以上の2点の考察を踏まえて、本稿のタイトルにもなっている英語の授業を英語で行う実践例を紹介したいと思う。

2. 「英語ができる」とは？

大学の先生方を対象にした大学英語教育学会の研究紀要に執筆する内容としては甚だ恐縮であるが、以下に「英語ができる」という目標の解釈に関する2つの論を予めデフォルメを承知の上で展開したいと思う。

まずは「伝家の宝刀」論である。高等学校で学ぶ英語は大学入試以外で使うことは前提としていない。つまり、大学入試突破が最終目標である。

英語は大学入試に向けて磨き上げることに価値がある。高校では入試に備えて文法や語彙の詰め込みを行う。授業は文法訳読を基本とする。例えば、I love you. という文なら、第3文型 S+V+O であると分析し、「私はあなたを愛する」と和訳する。当然 love と like の違いも解説する。さらに、主語を he に変えて3単現の s を忘れないように確認し、目的語を主語にした受動態への書き換えも説明する。要するに、教材が何であれ、教えたことは文法と語彙である。自由英作文は配点が低いので後回しにする。英語を話すことは大学入試では出題されないのだから教えない。聞くことはセンター試験対策が中心になる。楽天やユニクロだけが企業ではないし、生徒の将来は大学入学後に大学に任せればよいと考える。

すなわち、英語は大学に入るまでは「伝家の宝刀」のごとく使用はせずに磨き上げ、後のことは大学に任せようという考え方である。

もう1つは「台所の包丁」論である。英語を大学入試以外でも使うことを前提としている。

磨くのも大切であるが、英語は使ってこそ価値が出る。英語はコミュニケーションの道具であり、生徒には英語を使いながら生涯学んで欲しいと考える。例えば、I love you. という文なら、どのような場面で誰にどのような表情と声の調子で言うのか考えさせ実際に言わせたり、I love you. をセリフに含むスキットを作って発表させたり、さらに、ラブレターを読ませたり書かせたりする。大学入試の対策に加えて、将来生徒が英語をコミュニケーションの道具として使用する場面も想定しながら、英語を読むだけでなく、聞いたり、話したり、書いたりする力も養成する。高校生の段階では完璧でなくても、身近な話題について英語で意見が話せたり、英語を楽しんでいると思ってくれたりすることが大切であると考えます。

すなわち、英語は「台所の包丁」のごとく実際に使ってこそ意味がある、積極的に使いながら学んでいこうという考え方である。

3. 「なぜ」英語の授業を英語で行うのか

ここで私個人の立場を表明すると、私はどちらかといえば「台所の包丁」論者である。大学入試という実用的側面から考えると「伝家の宝刀」論の価値ももちろん認めるが、それを最終目標にして生徒に英語学習させるのでは、生徒は折角身に付けた英語力を大学入学と同時にさっさと捨て去ってしまう。大学に合格したのだからもう英語は勉強しなくていいと考えるのである。楽天やユニクロだけが企業ではないが、実際のコミュニケーションの場面で英語が使えるようになることを大学教育に全て任せてしまうのも問題であると考えます。

それでは、生徒に英語を「台所の包丁」のごとく末永くコミュニケーションの道具として使ってもらうにはどうすれば良いかと考えるとき、高校時代に大切になるのは、(1)英語学習は楽しいと思わせること、(2)実際に英語を使わせることの2つであると考えます。

まず、英語学習は楽しいと思わせることには理由がある。毎日英語の授業を50分行っても週に4時間10分しか練習をすることができない。参考までに、私の勤務する学校の部活動であれば1日に2時間30分、土日も練習すれば週7回、1週間で17時間30分の練習を行うことができる。英語が実技教科であるにも関わらず、部活動の4分の1の練習時間で大学入試という全国大会に対応できる選手を育てるのは不可能である。すなわち、授業で教えられることには限界がある。そう考えると、家庭学習が重要になる。授業では、生徒が自宅で独りでもできる文法や語彙の詰め込み作業は最小限にとどめ、生徒同士の協働学習や英語を楽しみと思わせるような活動を行うほうが結果的に効率が良いと考えている。英語を楽しみと思えば、生徒が自宅でも自主的に学習する可能性が高まるからである。さらに、高校卒業後も英語学習を楽しんで続けてくれれば、高校時代に英語をいやいや学習したために大学入学後に学習を放棄した集団を結果的に追い抜けると考えるからである。

英語学習を楽しみと思わせる上で、英語の授業を英語で行い、実際に生徒に英語を使わせることは有効な手段であると考えている。英語を読むだけでなく、聞いたり話したり書いたりする多角的なコミュニケーションの場面で用いれば、生徒の英語に対する認識を単なる受験の道具からコミュニケーションの道具へと変えることができると信じている。例えば、クラスメートを楽しませるために「愛情とお金とどちらが大切か」という主題でスキットをさせたり、ALT（外国語指導助手）に情報提供するために「日本にいる間にどこを訪れるべきか」という主題で文章を書かせたりすれば、英語はコミュニケーションの道具に変身する。そうすれば、文法や語彙を学習するのは、大学入試のためだけでなく、より円滑なコミュニケーションのためだと生徒の意識を変容させることができるのではなかろうか。つまり、相手にもっと分かりやすく伝えたい、相手をもっと分かるようになりたいから生徒は文法や語彙を学習し始めるのである。

そう考えると、文部科学省(2008年)が示した「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」(p.93)という方針は妥当であると思われる。

4. 英語の授業を英語で行う実践例

ここで、御参考までに、英語の授業を英語で行う実践例を紹介したい。今回は、著作権侵害の恐れがない、私が自分で書いた英文を題材として取り上げたい。まず、御一読願いたい。

KARYO WEEKLY, No.31: パリ行きの飛行機内で大失敗。かなり恥ずかしかったです。笑ってやってください。

To the entire world I admit I am a very stupid person. On December 25, 2003, I was on an airplane to Paris. Prior to departure, I had studied French diligently by listening to French conversation tapes every day for about two months. I had also been to Paris three times before, so I was fairly confident in my French.

Now on this Air France flight to Paris, French flight attendants started serving drinks, and it was my turn to order. My flight attendant smiled and asked me what I wanted. I confidently replied in my excellent French, “*Jus de pomme de terre, s’il vous plait.*” I wanted apple juice. Looking a bit confused, she asked me to repeat my order.

This didn’t make me nervous at all. This happens all the time when I speak in English. Even when I speak in perfect English, native speakers of English sometimes don’t understand me and ask me to repeat. So a bit more boldly and in a louder voice, I repeated my order in French, saying, “*Jus de pomme de terre, s’il vous plait.*” All I wanted was apple juice, and it was a very simple request.

She still looked confused. As I tried to repeat my order for the third time, her face lit up. She said, “*Oh, jus de pomme!*” It was then that a horrible realization hit me in the head. *Pomme de terre* means “potato” in English. So, when I said, “*Jus de pomme de terre, s’il vous plait,*” I was not asking for apple juice. I was saying, “Potato juice, please.” Who in the world would want to drink potato juice!

Now to the entire world, I admit and confess that I am a hopelessly stupid person. Laugh at me if you’re kind, but don’t call me Potato Man, *s’il vous plait.* (306 words)

--By Wiseman Plumfield

(This article was first published on January 15, 2004.)

この教材を45分の授業で料理することをイメージして、以下に授業でのセリフを書いてみようと思う。参考文献に挙げた諸先生の書物を参考にしたり、様々な研修会で習ったことを応用したりしながら、自分なりに組み立ててきた発展途上の授業パターンである。

この授業の目標としては、(1)英文を読んで概要をとらえること、(2)自ら経験したことに基づき英文を簡潔に書くことの2つを想定している。また、聞き、話し、読み、書くという4つの領域に係る言語活動を含むように配慮した。なお、生徒は通常から隣同士でペア・ワークを行っており、協働作業には慣れている。

Hello, everyone! Today, I would like you to read one of the articles I have written for *Karyo Weekly*. But, before we do that, let’s start off with a warm-up question. Today’s warm-up question is: “Do you like traveling? Why or why not?” Now, please do *janken* with your partner. You have 30 seconds to talk about this topic. Now, winners go first. Ready? 1, 2, 3, go! [*Janken* winners speak for 30 seconds.] Now, switch. Ready? 1, 2, 3, go! [*Janken* losers speak for 30 seconds.] OK, time is over. [The teacher asks a few students to share their answers.]

OK. Now, I would like you to read one of the stories I have written for *Karyo Weekly*. Something funny happened on my trip to Paris. In fact, I made a bad mistake. It’s a true story. Would you like to read it? OK.

Now, before I read the story, let me write two questions on the board. First, when did this story happen? Second, who appears in this story? Please try to answer these questions while you listen to the story. Now, let me begin.

[The teacher reads the passage aloud.]

Now, let's check the answers. First, please talk with your partner and compare your answers. I will give you twenty seconds. [After 20 seconds.] Now, what's the answer to question 1? When did this story happen? [The students answer the question.] Great! How about question 2? Who appears in this story? [The students answer the question.] Very good!

OK. Now, let's do pair work. I will give you the text and a worksheet. Please put your desks together and get into pairs. [The teacher gives each pair the text and the worksheet.] Now, you have fifteen minutes to answer the questions. If you finish all the questions, please raise your hands. I will check your answers.

ANSWER THE FOLLOWING QUESTIONS.

1. Mr. Plumfield was on his way back from Paris. T or F?
2. How long had he been studying French tapes before he went on the trip?
3. Why was Mr. Plumfield not nervous?
4. Mr. Plumfield wanted to drink apple juice. T or F?
5. What does he admit to the whole world?
6. *Une leçon française: Assortissez les mots (1) - (4) avec les mots (a) - (d).*

(1) <i>jus</i>	(a) apple
(2) <i>pomme</i>	(b) juice
(3) <i>pomme de terre</i>	(c) please
(4) <i>s'il vous plait</i>	(d) potato
7. Translate "*Jus de pomme de terre, s'il vous plait.*" into English.

本文とワークシートはペアで1枚ずつ配布する。ポイントは、1人に1枚ずつではなく、ペアで1枚ずつである。2人が同じワークシートを見ることでペアでの協働作業を促す仕組みを作る。

また、15分間の解答時間を設定しているが、あくまで目安であり、全てのペアが自力で解答できそうな場合には、成就感を与えるため、時間を延長してでも最後まで答えさせるように配慮している。他方、制限時間が来ても半分以上のペアが解答できていない場合は、問題の難易度が高すぎたと考え、完答したペアの協力も得ながら簡単に解説を行い、全体で答え合わせを行うようにしている。

さて、生徒に示した解答時間の間は、教室を巡回して解答チェックをしながら、質問に答えたり、ヒントを与えたりする。生徒同士は日本語で相談しているが、私が生徒に話す際はできるだけ英語を使うようにしている。なお、教室を巡回する際はクラス全体にも目を配り、解答が終了して挙手しているペアの所にはすぐに駆けつけ、答え合わせを行う。

また、全て正解で解答が完了したペアにはそれぞれ本文とワークシートをもう1セット渡し、各自が自宅で復習できる条件を整える。多少煩雑であるが、最初から個人に1枚ワーク

シートを渡すとペア・ワークが成立しない場合が多いのでやむを得ないと考えている。

さらに、次のような質問が書かれた罫線入りのワークシートを渡し、各自でエッセイを書くように指示する。このワークシートは授業中に完成しなければ宿題になり、提出した生徒にはボーナス点が付与される仕組みになっている。

ESSAY: Write about something funny/strange that happened on a trip you made. Your essay should be more than 50 words.

その際は、予め *Something funny happened on my trip to Kyoto three years ago.* と板書しておき、エッセイの始め方のモデルを示す。セリフとしては、“*Here’s another worksheet. Please read the question and write your answer in English. Also, please look at the blackboard. I have written a sample beginning.*”と言ったりする。

残りの時間は、再び教室を回りながら、生徒が書いている英作文の添削をできる範囲で行いつつ、授業の終了時に次のように締めくくる。

OK. I’m afraid we are running out of time. Please remember to hand in your essays at the beginning of the next lesson. I am looking forward to reading your essays. Thank you. See you soon!

以上を振り返って分かるのが、英語の授業を英語で行うのは工夫次第で意外に簡単である。手品の種明かしをするようで気が進まないが、あえてポイントをまとめてみたい。

まず、ほとんどのセリフは常套句である。私自身どう言えば生徒に通じるのか最初は戸惑ったが、今では参考文献で調べた同じセリフを迷いなく使っている。生徒もすぐに慣れて自然に反応できるようになる。

次に、あまり英語で話さなくても済むように、必要なことはワークシートに英語で予め書いておけばよい。ALT にチェックしてもらっているので、ワークシートの英文を読めば堂々と正確な英語で話せる。

その上、ペア・ワークによる協働学習を用いれば、生徒がお互いに分からないところを説明し合うので、教員が英語で説明する機会がさらに減る。余談になるが、教員が教室を巡回する際に正解できたペアにマルをつけながら「ピンポン！」と元気よく言っているのを聞けば、私たちもマルを付けて欲しいと思い、思わずがんばってしまうのが学習者心理ではなかろうか。

文法説明はどうするのだという疑問が沸くと思うが、ペアから質問を受けた際に、必要があれば、日本語で行えばよい。生徒が分からないところを教えてくれるわけだから、こちらから全て説明するより効率的である。多くのペアから同じ質問が出れば、クラス全体に説明する必然性があるので、そうする場合もある。

それでも、日本語で説明をしっかりしないと生徒は分からないという御批判を読者から頂戴するかもしれないが、私の考えでは、その様なコミュニケーションを拒むような英文は生徒が分かりやすいように多少簡易な英語に書き直して生徒に示すのが40人を相手にするよ

うな一斉授業では妥当だと思う。自分で書き直さなくても、ALTに書き直しを頼むこともできる。

付け加えになるが、生徒が効率的に学習できるように次の様な語彙リストを作成して渡すこともある。生徒に買わせている大学入試用の単語帳と照合して厳選した、いわゆる「入試に出る」語彙リストである。なお、今回実際に行った授業ではこのような語彙リストは配布していない。生徒が解答する必要に迫られて自分で語彙を調べるであろうと判断したためである。

#	チェック	英語	品詞	日本語
1	☐ ☐ ☐	admit	動詞	認める
2	☐ ☐ ☐	article	名詞	(新聞・雑誌の)記事, 品物
3	☐ ☐ ☐	confess	動詞	自白する, 白状する
4	☐ ☐ ☐	confident	形容詞	自信がある, 確信している
5	☐ ☐ ☐	confused	形容詞	混乱した, 困惑した
6	☐ ☐ ☐	conversation	名詞	会話
7	☐ ☐ ☐	departure	名詞	出発
8	☐ ☐ ☐	diligently	副詞	勤勉に
9	☐ ☐ ☐	entire	形容詞	全体の
10	☐ ☐ ☐	fairly	副詞	かなり, 公平に
11	☐ ☐ ☐	flight	名詞	空の旅, 飛行便
12	☐ ☐ ☐	horrible	形容詞	恐ろしい
13	☐ ☐ ☐	nervous	形容詞	神経質な, そわそわした
14	☐ ☐ ☐	perfect	名詞	完全な
15	☐ ☐ ☐	prior to A	熟語	Aの前に
16	☐ ☐ ☐	repeat	動詞	繰り返す
17	☐ ☐ ☐	request	名詞	要請
18	☐ ☐ ☐	stupid	形容詞	ばかな, 愚かな

5. おわりに

私は授業だけで全てを教えることは不可能だと考えている。膨大な時間を投入することのできる部活動ですら全てを教え込むのは難しいのに、ましてや限られた学校の授業で全てを教え込むアプローチは破綻してしまう。だからこそ、授業は生徒のヤル気に火をつける場だと考える。「楽しい」「ほめられてうれしい」という体験をさせる、生徒の主体性を育てながら、学習に対する希望を与え、将来への展望を示すのが授業の重要な役割だと考える。

その中で「授業を英語で行うこと」は目標達成の手段の1つにすぎない。「授業を英語で行うこと」より「どんな生徒を育てたいか」がはるかに重要である。教員がどんな英語力を生徒に付けさせたいかで、授業の内容や方法は変わる。私は、円滑なコミュニケーションを行うためには文法や語彙の知識は不可欠であると考えており、決して文法や語彙を軽視しているわけではない。例えば、現在教えている高校3年生の単語テストの1回のテスト範囲は、生徒と相談して徐々に増やしていった結果、大学受験用の単語帳の1000単語を超えている。

しかしながら、より大切なのは、生徒と英語を使ってコミュニケーションができる楽しさを共有することだと考えており、それを実現するために私は授業を組み立てていると言っても過言ではない。「台所の包丁」のように気軽に英語を使い、英語でコミュニケーションすることを楽しんで欲しいからである。

最後になるが、授業で成果が上がるときは、到達目標が教員チーム及び生徒と教員の間で意識、共有されているときであると最近強く感じている。その意味で、同じ到達目標に向かって共に歩んでいる同僚の先生や生徒に心から感謝している。例の新薬が開発されるまでは、「同じやるなら、楽しまにゃ損々」だと思うのだ。

参考文献

- Gardner, B., & Gardner, F. (2000). *Classroom English (Oxford Basics)*. Oxford: Oxford University Press.
- Howatt, A. P. R. (1981). *Handbook of Classroom English*. Oxford: Oxford University Press.
- シャルコフ, R. (2008). 「ワークシート作成上の心得」. 『平成 18～20 年度 SELHi 研究開発実施報告書』(山口県立華陵高等学校), pp. 38-39.
- 田尻悟郎. (2009). 『(英語) 授業改革論』. 教育出版.
- 日本英語検定協会. (2008). 「本当にいい授業とは『教えないこと』」. 『STEP 英語情報』(日本英語検定協会), pp. 26-27.
- 文部科学省. (2003). 『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』.
- 文部科学省. (2008). 『高等学校学習指導要領案』.
- 安河内哲也. (2007). 『できる人の教え方』. 中経出版.